

## 第二章 内申書発行お預け

- 11月に幼馴染のS君が独学学習での成果を出し、何と全国模試で30位内に入って、内心火が付いた。夜中の学習を少し真面目にし、何とか他流模試は2回受けた。

その結果は、予想以上に良かったので、年内に内申書を貰おうと故人のもとにはせ参じ、発行をお願いした。故人からは、「1月の現役最後の模試を受けたら出してあげる」と言われ、すごすごと二度目の寂しい帰宅となった。内心煮えかえていたが、職員室には、あの山岸先生がいて、目線が合った時、何とニヤッと笑っていた。



👉 高校3年時の松尾祭にて筆者演奏シーン

## 第三章 内申書発行

- 1月の高校模試の結果と、そこまで受けた模試の成績表3回分を持参し、内申書の発行をお願いしたら、ようやくいただけただのである。現役時代より成績が結構伸びていたのにも拘わらず、故人は褒めることなく淡々と書類を渡してくれた。その時に一言!「油断せず、高望みせず、バンド活動はせず頑張れよ」と、忠告と励ましのお言葉をいただき帰宅した。これが、故人の優しさだったのでしょ。

## 第四章 受験報告と惜別挨拶

- 運よく第一志望の大学と学科に合格したので、3月下旬に故人のお宅へ御礼の挨拶に伺った。故人の第一声は、「お前どうしたんだよ!」だった。そこで筆者は、「先生の厳しいいじめが、このような結果になったと思います!」とお返ししたのが、とても気持ち良かった思い出である。帰り際、故人から、「何で合格した学科(画像工学)を選択したんだ?」「それは、日本に一つしかない学科を選択すれば就職が楽と思ったからです。」と答えたら、「なるほどなあ!」とようやく認めてくれた返答だった。



👉 社会担当 山岸先生

- 玄関先で、「牧野君、山岸先生にも挨拶するか」と言ってくれて近所の山岸先生を呼び出していただいた。そこで、「山岸先生のお陰で大学受験成功しました」と言ったら、先生は苦笑いしながら、「良く頑張ったおめでとう!」と言っていただけた。すべて楽しかった浪人時代のリアルストーリーでした。  
(昭和42年4月～43年3月)